選評

審査委員長　嶋津与志

力作ぞろい 候補作は拮抗

児童文学は子どもたちの想像力、好奇心、優しい心をはぐくみ、人格形成の豊かな栄養素となる。沖縄市社会福祉協議会が「福祉と文化が出会う創造的な風土づくり」の理念をかかげて県内初の児童文学賞を設け、新人作家の登竜門として定着してきた本賞もはや22回を重ね、今回を区切りにいったんハーフタイムになるが、当初の目標は十分達成できたと高く評価したい。

今回は応募総数74編（規定外4編含む）。市内有識者委員で編成された第1次審査会で7編に絞り込まれた作品を又吉栄喜、岸本マチ子、嶋の3委員が慎重に最終選考を行った。

候補作はいずれも力作ぞろいで拮抗（きっこう）したが、最終段階で文章の完成度とテーマの重みがきめ手になったようだ。

大賞「けんたの冒険」（山川直壮）は、これぞ児童文学といえる秀作。登校すればいじめられ、帰れば母子家庭のわびしさを味わっている少年が、ある日〝クジラを釣り上げる〟という幻想体験をへて友情が芽生え明るく成長していく。子どもたちへの作者のエールに読者も共鳴できるのは、やはり練れた文章の力だろう。

優秀賞「ばぁちゃんの地図」（野原せい）は、老人ホームの老婦人と地域の子どもたちとの交流体験を明るく素直に描いた作品。高齢者が家族や地域から隔離されがちな現代社会の老人福祉問題が隠し味になって子どもたちの健気（けなげ）な活躍が素直に胸にしみてくる。所々に用語や描写などの稚拙さも目につくが主人公たちの生きいきした描写が補っている。

奨励賞「耳のヒーロー」（オカ・ラクマ）は、ふだんはクラスのお荷物になっている発達障害の子どもがクラス担任の優しい計らいで隠れた聴覚能力を発揮して脱走したハムスターを捕らえる、という単純で明るい物語。欲をいえばいま少し曲折のドラマがほしかった。

奨励賞「ねじれ耳洋平の物語」（兼城賢栄）は、説話風の語り口で自由奔放にストーリーを展開しているのが魅力だが、奔放すぎて荒唐無稽になりがち。難しい漢字が多いのも難点。

残念ながらあと一歩で賞をのがした「風にのった旅人」（そらまめかずえ）、「魂の通る道」（山里嬉久野）「ウッピ」（久場勝未）の3作にも捨てがたい魅力があったが、いずれも未完成の感があった。何度でも書き直す作品への愛情と執着心を期待したい。